エクラと英雄達の日常

曇天もよう

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然と召喚された男、エクラはひょんなことから様々な世界に生きる英雄達を召喚し、アスク王国の手助けをすることとなった。

これはその手助けをすることとなったエクラと、召喚された英雄達の日常物語。

基本会話中心。作者の垢にいるキャラがメインとなりますので、このキャラをというご期待には沿えませんのでご了承ください。

目　次

エクラとユリアとヨシュアと。――1
エクラとフィヨルムとフェリシアと。――10
エクラとナンナとラケシスと――18

エクラとユリアとヨシュアと。

「エクラ様…ご無理をなさらずに…」
「エクラ…あんたなぁ…」
　とある女性と男性がエクラと呼んだ人のことを心配している。周りには、半壊した古めかしい遺跡のようなものが存在しているだけで、他には何も存在しない場所で、二人とエクラと呼ばれたフードを被った男の目の前には石板があるだけであった。
　その石版を目の前にしてエクラと呼ばれた男は突っ伏していた。それを二人は心配しているようであった。
「エクラ様…以前からすり抜けが続いていると言われていたのですから、少しオーブを使われるのを控えた方が…」
「あはは…ユリア…何度目のすり抜けかな…？」
「…確か１３度目だな…朝にオーブを手に入れて来たから早速回すって言ってたから付いてきたが…ここまで来ると賭け事してみたらどうだ？」
「…はい…ヨシュア様が言われましたように１３回目です…」
「…まだ諦めない…マークちゃんがやってくるまで…」

「…！エクラ様…春祭りにやってくるというお方を見て欲しいと言われていたではありませんか…？とりあえず…そこまで貯めましょう…？」
「…ああ…カチュアか…真面目な子が恥ずかしそうに感じながらエッチな格好はしてるのっていいよね…戦渦のオーブがまだ残ってるからそっちを割り当てるさ…俺はマークちゃんが引けるまで止まらないんだ…」
　そう言うとエクラはユリアとヨシュアから背を向けて何やら儀式のようなものを始めてしまった。
　こうなってしまうと、自分たちが何を言っても無駄をだとヨシュアも諦めてしまった。しかし、ユリアは心配そうにエクラの方を見つめていた。
「しかし、あんたは毎回エクラに付いてきて召喚するのを見ているのか？」
「はい…私はエクラ様に多くのことをさせてもらっていますので…お支えできれば…と…」
「無償にやりたいってことなのか？」
「無償…というわけでもないですが…ヨシュア様はどうなのですか…？」
「ん？俺かい？あんたは俺が王族ってことは知ってるかい？」
「いえ…知りませんでした…ヨシュア様は王族の方だったのですね。傭兵と言われている割には綺麗な格好などされているな…と思っていましたが…」

「知らなかったのか。まあ、いい。俺は家を勝手に飛びだしたからな。だが俺はいつか国に戻り王位を継ぐ。この身を祖国のために捧げるつもりなのさ」
「出身はジャハナ王国と言われていましたね。ジャハナ王国はどのような国だったのでしょうか?」
「ジャハナか?ジャハナ砂漠と傭兵の国さ。マギ・ヴァル大陸の南東部に位置するんだが、国土の大半が砂漠に閉じ込められているから貧しいんだ。普通の国なら農民などがいるもんだがうちの国じゃわずかな土地でしか出来ないのさ。だから国民の多くは傭兵として生きようとする。これが大まかなうちの国って感じだな」
「そうなのですか…私の父様はグランベル帝国の皇帝なのですが、私はそのようなことをまだ考えたこともありませんでした…。国はセリス様がお引き継ぎなさりましたので…」
「セリス…あんたの異母兄弟だったな」
「はい…私の父様はシグルド様に謝りきれないほど酷いことをされてしまいました…私がセリス様をお支えすること…それがせめてものシグルド様に対する私の贖罪なのです…」
「…そうか…あんたもいろいろ大変なんだな…話が逸れちまったな。エクラについてだったな」

「あ…すみません…余計なことを話してしまったばかりに…」
「構わないさ。簡潔に言うと俺はあいつをジャハナに連れ帰りたい」
「連れ帰る…ですか？」
「ああ。あいつは今はあんな感じだが、戦いのときの指揮を見ればとても優れたやつだということはあんたも分かってるだろう？」
「…はい…私では勝てないと思ってしまうような局面であっても、エクラ様の指揮に従うと勝ててしまうのです…本当に凄いお方であると思います…」
「そうだろう？だから俺はあいつを国の相談役などに登用したいのさ。国に賢いやつは何人いても困らないからな」
「確かにそうですが…」
「なんだい？俺に連れて帰られちゃ困ると？」
「それは…！…そうですが…」
　この気持ちを何と言えばいいか分からず困っているユリアを見ていたヨシュアは懐から一つのコインを取り出した。
「じゃあ、俺と勝負しないか？あんたが負けたらエクラについて思ってることを正直に話してもらおうか」
　突然のことにユリアはびっくりした表情を浮かべる。しかし、そんなことを気にも溜

めずヨシュアは続ける。
「俺だって思ってたことを話したんだ。これくらいは聞く権利はあるだろう？」
「それはそうですが…」
「代わりに俺が負けた場合…あんたが望むことをしよう。何だって言ってくれればいい」
「…何だって…ですか…？」
「ああ。探し物をして欲しいと言われればそいつを見つけるまで手伝うし、誰か気に入らない奴がいるならそいつを黙らせることだってしよう」
「…」
　ユリアは少し黙ってどうするかを考える。その間ヨシュアは何も言わず待っていたが、しばらくして、ユリアが納得したようで、首を縦に振った。
「おっ、乗ってくれるか。そちらは何をお望みで？」
　ヨシュアは何を賭けるのかユリアに質問をする。ユリアは少し黙ってから、少し恥ずかしそうに答えた。
「あの…いつもエクラ様にお世話になってるので…エクラ様が少しでも休ませてあげられるようにしたいのです。具体的になにをする…などは決まってないのですが、一緒に考えてもらいたいのです」

　ヨシュアはそれを聞くと少し考えるような表情を浮かべた。そのヨシュアの表情をユリアは伺うようにしながら、ヨシュアが何というか待っていると、ヨシュアは話し始める。
「なるほどな。優しいあんたらしいさ。いいぜ、あんたの賭け了解した。お互いに賭けるものは決まった。さあ、やろうか」
　ヨシュアは胸元からキラリと光る一枚のコインを取り出した。それには片面には誰か分からない人物の顔が、その裏面には建物が描かれていた。
「こいつが勝負するものだ。こっちの人の顔が写ってるのが表、逆が裏になる。さあ、どっちを選ぶ？」
「…イカサマはされないですよね…？」
「ああ。俺は素人にイカサマはしない主義なんだ。安心してくれ」
「…そうですか…分かりました…少し考えるので待っててくださいね」
「分かった。俺はあんたが選んだものとは反対にするから、自由に決めてくれ」
「はい…」
　ユリアはどちらの面を選ぶか少し考え始めた。ヨシュアはユリアが選ぶのを待ちながらエクラがどんな様子をしているのか眺めていた。エクラはあいも変わらず召喚を続けているようで、召喚された英雄たちが、ヨシュアたちが普段生活している拠点、ヴァ

イスブレイブに移動していっているのが見えた。
あの様子だと未だにエクラが欲しいと呟いていた、マークという人物は来ていないのだろうと思った。
そんな考えを巡らせていると、ユリアはどちらを選ぶか決めたようで話しかけて来ていた。
「…すみません…大丈夫ですか…？」
「…ああ…すまない、大丈夫だ。それでどっちにするんだ」
「はい…私は表にすることにします」
「ほう、どうして表にしたんだ？」
ヨシュアは表を選んだ理由をユリアに聞く。するとユリアは答える。
「なんとなくの直感です…深く考えるよりも直感を信じた方がいいかと思いましたので…」
「なるほどな。分かった、じゃあ俺は裏だな。覚悟はいいかい？」
「…少し怖いですが…覚悟はできました」
「よし、じゃあ回すぞ」
そう告げるとヨシュアは、自分の利き手である右手で握り拳を作り、その親指の上にコインを乗せた。そして、親指をその握り拳から抜き、コインを空に放った。

コインはクルクルと回転しながら、空を舞った。そして、ヨシュアの右手に向かって落ちてくる。そのコインをヨシュアは覆い隠すように右手に落とした。
「さて…開けるぞ。さあ…どちらが勝ったか…」
ヨシュアがそう言ってコインを隠していた左手を外した時だった。
「ギャァァァァァ!!!!クロムがきちゃったぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
先程から黙々と召喚をしていたエクラが突然絶叫したのだった。
「エクラ様!」
ユリアはコインを先程まで気にしていたが、エクラが叫ぶと同時にエクラの元へと駆け出して行ってしまった。
ユリアはエクラに駆け寄るや否やすぐに励ますような言葉をかけていた。
エクラは放心状態のようであったので、ユリアの声は聞こえていないようであった。
そして一人取り残されてしまったヨシュアは独り言をつぶやいていた。
「あ、おい!…全く…いいところだったのにな。…それにしても…賭けは…負けていたな…。まあ、負けは負けだ。ユリアの言っていたことを手伝うとするか。まずは…あいつをはげますとするか…」
ヨシュアは一人ゆっくりと落ち込むエクラと、それを励ますユリアの元へと歩いて

行ったのだった。

エクラとフィヨルムとフェリシアと。

「…どうして私が…？」

「同じ氷を使う人だからですよ～！敏腕メイドとして同じ氷を使う人には負けません～！」

フィヨルムは正直に言って突然ふっかけられた勝負にどうしていいか分からないでいた。突然暗夜王国のメイドフェリシアが自分の元にやってくるやいなや、家事の勝負をしましょうと言ってきたのだ。

あまりに突然のことにいろいろと戸惑っているフィヨルムに同じく暗夜王国のバトラーであるジョーカーが声をかけてきた。

「はぁ、すまないが受けてやってくないか、フィヨルム姫。こいつがそう言って聞かないんだ。これで負けたらこいつが如何にダメか分かるだろうから受けて欲しいんだ。頼む、この通りだ」

ジョーカーはそう言うと腰を９０度ほどに曲げて、とても丁寧な頼み方をしていた。フェリシアはエクラからジョーカーは主君であるカムイ以外に丁寧なことをしないと聞いていたため、とても驚いていた。

「そ、そんなことをされても……分かりました…。私で良ければお付き合いしますよ」
「じゃあ早速いきますよ～！」
「ちょっ、ちょっと待ってください！どこに行くのですか…教えて…」
「行けば分かります～！」
　こうしてフィヨルムはフェリシアに無理矢理引っ張られてどこかへと連れていかれたのであった。

「着きました～！じゃあ皆さんよろしくお願いします～！」
　特務機関のあるヴァイスブレイヴの厳かな扉をフェリシアが開けると、そこには二つの台が並んでおり、そしてその中央にはギュンター、エクラ、ラインハルトがいた。
　フェリシアが入ってくるとすぐにギュンターが二人の元へ寄ってきて話をかけてくる。
「フェリシア、一国の王女様であられるフィヨルム姫を引っ張って来たのか？」
「そうですよ～…はわわ！やってしまいました～…」
「申し訳ございません、フィヨルム姫。様々なご無礼を同僚が犯してしまたようでございます。どうかこのご無礼をお許しいただきたい」

「私は気にしていませんので…」
「なんで俺も…？」
　エクラもどうして連れてこられたのか分からず困惑しているような表情を浮かべていたが、それを見越したようにギュンターが説明を始める。
「私から今回の件について説明させていただきます。今回はこのフェリシアがこちら、フィヨルム姫に料理の勝負をすると言い出しましたことが発端でございます。なぜ料理勝負なのかは些か謎でございますが、どうしてもと言っておりましたので今回この場を設けたのでございます。ご理解いただけたでしょうか？」
「はい。理解できました」
「それでなんで俺が呼ばれたんだ？」
「今回の勝負に関して判定を付ける判定員としてエクラ殿をお呼びしたのでございます」
「…なるほど。分かった。ところでラインハルトはどうしてここに？」
　エクラが後ろにいるラインハルトに声をかけると、ラインハルトは答え始める。
「私は今回エクラ様の守衛としてここに参上させていただいた次第でございます。何か城内で問題があった際に連絡を受け、エクラ様に早急に情報を伝える役割も兼ねております。ご理解いただけましたでしょうか？」

「なるほどな。分かった。それで早速料理に入るのか？」
「はい。早速入ってもらいます。あまり長い時間エクラ様を拘束していると先ほどライン ハルト殿が言われましたように敵軍の進行があった際に問題が発生する可能性が高くなる可能性があります。今は戦渦が発生しておりますので、用心しておくに越したことはありません」
「俺は納得したが、フィヨルムもフェリシアも納得したのか？」
「はい～！早速料理作りますよ～！」
「私も納得しました。あまり料理に自信はありませんが頑張らせていただきます」
「では早速初めていただきましょう。料理に使う食材に関してはアルフォンス王子に提供していただいておりますので、ご自由にお使いくださいませ。器具についてもそちらの台に用意しておりますのでご自由にお使いください。その他足りないものがあれば私にお申し付けください」
「じゃあ、今から始めてくれ。制限時間は１２０分としておく」
　ジョーカーが合図をすると早速二人は料理を作り出した。
　フェリシアは最初から何を作るのか決めていたようで、すぐに料理に取り掛かり始めたが、フィヨルムは先ほど聞かされたばかりなので何を作ろうか悩んでいるようであった。

５分ほど食材とにらめっこをしながら悩んでいたフィヨルムだったが、どうやら決まったらしく、野菜やキノコを取るとまず丁寧に水洗いをして手際よく食材を切っていく。その手際の良さにジョーカーもギュンターも驚いていたが、フィヨルムは意に介さず料理を続けていく。

フィヨルムもフェリシアも鍋を取り出し、作っているようだが、何を作っているのかは未だ分からない。

何を二人が作るのか…それを楽しみに待ちながら時間が過ぎるのをエクラは待ったのだった。

「出来ました。皆様の元にお持ちしますのでお待ちください」

先にフィヨルムが完成したようで、鍋から白色のスープを掬い、各皿に盛っていく。

そして、盛り終わると、エクラ、ジョーカー、ギュンター、そしてラインハルトにも配った。

ギュンターやジョーカーはスープをスプーンで掬い、香りを嗅いで匂いを確認している。

エクラやラインハルトはスープですくってこそいなかったが、同じように匂いを嗅い

でいた。
　すると、クリームスープの良い匂いが漂って来た。
「こちらはニフル王国の伝統的なスープ料理になります。ニフル王国は一年のほとんどが雪に包まれています。そのため、こうした肉や魚を使わない保存食を使った料理が多いんです。今回は牛乳、きのこ、野菜を使ったスープを作ってみました。是非食べてみてください」
　フィヨルムに促されたエクラたちは早速スープを口に運ぶ。
　すると、口に牛乳のまろやかさが広がり、程よく解された野菜が噛むととろけるように消えてゆく。
　あまりの想定外の美味しさにジョーカーは驚きを隠せずにいて、どのような作り方をしたのかフィヨルムに聞いていた。
　フィヨルムはその詰め寄り方に、少々驚いていたが、作り方を実際に作りながら説明をしていた。
　そして、ギュンターもその美味しさを噛み締めているようで、皆が美味しいと思ったのは間違いないようであった。
「私の料理は如何だったでしょうか…？」
　フィヨルムはジョーカーに説明を終えるとエクラの元にやって来て味がどうであっ

たか尋ねる。
「ああ、すごく美味しかった。こんなに美味しいスープは飲んだことがないな。フィヨルムがこんなに美味しい料理を作れるなんて知らなかったから驚いた。すごいな」
　エクラは正直に思った感想をフィヨルムに伝える。するとフィヨルムはとても嬉しそうに頷いたのであった。
「で、できましたよ～！」
　そんなフィヨルムの料理に皆が舌鼓をうっているときにフェリシアからも料理が完成したと伝えられる。
　ジョーカーとギュンターはフィヨルムの料理を机に置き、フェリシアの料理が来るのを待つ。
　そしてらフェリシアの料理がやって来たのだが、フェリシアを除くこの部屋にいる人たちは料理が机に置かれた瞬間にはっきりと分かった。これはやばい…と。
　フィヨルムと同じようにスープを作ったようではあるのだが、変な匂いが漂っており、頭がそれを体内に入れるのを本能的に拒否しているようであった。
「ふふん！今回は自信作です～！さあ！皆さん食べちゃっていいんですよ～！」
　フェリシアは自信満々そうにしているが、正直に言ってこれを食べたくないというのが本音であった。

隣の二人を横目で見てみると、ジョーカーは『どうしたらこんな料理ができるのか!?』とフェリシアに問い詰めていて、ギュンターは頭を抱えて絶望しているようであった。

しかし当のフェリシアは失敗していることにも気づいていないようであった。

「……エクラ様…ギュンター殿、フィヨルム姫、セシリア将軍が呼んでいます。ここで戻ることとしましょう。何かあったのかもしれません」

あまりにひどい顔をしていたエクラとギュンター、フィヨルムを見かねたラインハルトはここから退出することを提案してきた。3人はラインハルトに従い、部屋を出ることにしたのだった。

その際、ジョーカーか『俺も連れて行け!』と嘆いていたが、全員が聞こえなかったふりをしていたのだった。

翌日、体調を崩し、ジョーカーの能力は大きく低下することになってしまったと聞き、エクラはあそこで機転を利かせてくれたラインハルトに感謝しないといけないなと思うのであった。

エクラとナンナとラケシスと

「かあさま！おいていかないで！」
「…私は貴女の兄のデルムッドを向かいにいかないといけません。したり離れ離れにしてしまっては可哀想ですから…」
「やだ！ならわたしもいく！」
「ナンナ、ラケシスを困らせたらダメだろう？」
「でも…！」
「…ごめんなさい、もう行くわ…。……ナンナの事をよろしくね…フィン…」
「…ああ」

短く言葉を交わした母さまはそのまま行ってしまった。これが最後に見た母様の姿だった。母さまは私のお兄さまの元には辿り着くことなく、行方不明となってしまった。私はいつまで経っても帰ってこない母さまは、お兄さまの元に着いてから帰ってこれない理由があったから帰って来てくださらないのだと思いたかった。

でも現実は非情だった。私の願いは届いてはくれなかった。

レンスター城が陥落し、西の教会に身を隠して解放軍が来てくれるのを待っていた

時、セリス様、お兄さまたちが私、リーフ様、お父さまを助けに来てくださった。
その時は死地から助かった安堵感が大きかった。でもお兄さまと再会し話をした時、そこにはラケシス母さまはいなかった。お兄さまは母さまに会ったことはないと言っていた。
これが何を指しているのか…それは、ラケシス母さまは行方不明になってしまったということであった。あの日の夜は涙が止まらなかった。
いつか、どこかでまた母さまと再会できると思っていた母さまはもうこの世にはいないのかもしれない、それを知るのはとても辛いことだった。
そして今日の夜は、あの日を思い出すような雨がポツリポツリと降る肌寒い夜だった。
夜になると出撃することは基本ないので、私はエクラさまから貸していただいている私室のベッドの上に寝転んでいた。
エクラさまは嬉しいことに、私を頼りにしてくださってるので、よくフレンドさまへの友好の証を持っていく役割や、フレンドさまの救援といった仕事をさせていただけています。これは数ある英雄の中でも、私だけがさせていただけているお仕事なので、頑張らせていただいているのですが、最近は休みがなかったので、今日一日は休みをもらっていたのです。

せっかくの休みだったので、アスク王国城下のお店でペンダントを買ってみたり、美味しそうなものを食べてゆっくりしていたのですが、午後にはすることがなくなったので、最近アスク王国へとやって来たリーンさんやオルエンさんとお話ししてました。

やがて夜になったので、今日は早めに寝ようかと思ってお風呂にも入り、ゆっくりしていたのですが、部屋の扉がノックされたので、返事をしました。

すると、エクラさまが中に入りたいので開けて欲しいと言われていました。

正直なところ、お風呂上がりでしたので、男性と会うのは気がひけるものではありましたが、わざわざこの時間に直接部屋にやって来られる訳ですから、何かしら理由があってのことだろうと思い、少しお時間をいただいてからエクラさまを部屋の中へとお通しいたしました。

エクラさまは、こんな時間に突然押しかけたことを謝っていらっしゃいましたが、気にしていませんよ、と伝えて、部屋にあった紅茶を出しました。

お互いに紅茶を飲んで少し明日からの動きや、私にくださった武器の持ち替えなどを相談し、もう時刻も11時を回ろうとしたときでした。

エクラさまは、1人ここに呼んでいるから話をして欲しい、そうとだけ伝えて、自分のお部屋へと帰っていってしまいました。

こんな時間に誰なんだろう？そんな気持ちと、そろそろ眠たくなり、瞼が重くなって

きたことを感じながら、その人物を待っていると、少ししてから、同じようにノックをする音が鳴り響いたため、その人物を中へと招き入れた。

そして、その人物に私は心底驚かされました。

サラサラとしたきれいな金髪、きれいな茶色をした目、それはまさに、私が会いたいと願ってやまなかった、ラケシス母さまに間違いありませんでした。

「…貴女がナンナ…ね？」

「……はい…ラケシス母さま…私は…貴女の…娘です」

私はそう言いながらもラケシス母さまに抱きついていました。

気づいたらそうしていました。抱きついた時の母さまの匂い、それは確かに、昔にラケシス母さまに抱きかかえてもらった時に匂っていた匂いと同じものでした。この匂いを嗅いでいると、自然と昔を思い出すようで、涙が溢れて止まらなくなってしまいました。

そんな私を母さまは、何も言わずに抱きしめ、頭を撫でてくださりました。

昔はこうしてよく撫でてくださりましたが、今となっては会うことすら叶わない母さま…そんな母さまが目の前にいる…そんなことがとても信じられないでいました。

「今まで寂しい思いをさせてしまってごめんなさい。私はまだ貴女を産んではいないけ

ど、幼い貴女を置いて一人行ってしまったということを聞いてしまった。これがどんなに寂しいことか…今の私はまだ貴女を産んではいないけど、私に謝らせて欲しいの。ごめんなさい…」

母さまは謝ってこられました。確かに今までは私を置いて行ったことを恨んだことや、しないで欲しかった、と何度も何度も思いました。でも今は不思議とそんな恨むような考えは浮かんできませんでした。

ただひたすら、ひたすらに生きている母さまに会うことが出来たことに嬉しさが溢れてくるばかりでした。

「ううっ…母さま…母さま…!また…こうして…お会いできて嬉しいです…この世界では、私を置いてもう一人でどこにも行かないでください…」

「ええ…せめて…この世界だけでも…貴女の近くにいるわ」

そんなラケシス言葉に涙が止まらなくなってしまったラケシスだったが、それとは対照的に雨は降り止み、綺麗な月光が部屋へ射し込むようになっていた。